

アティピカル・インタラクションのエスノメソドロジー／会話分析の展開

——ALSの人による口文字コミュニケーションから——

北星学園大学 水川喜文

1 目的

本研究の目的は、アティピカル・インタラクション（コミュニケーションに障害のある人を含む相互行為）のエスノメソドロジー／会話分析的研究を概観し、エスノメソドロジー的な成員カテゴリーの分析(MCA)を用いた研究の可能性を例証(demonstration)によって提示することである。

2 方法

本研究では、まず、ウィルキンソン (2008)などを参考にして、会話分析（エスノメソドロジーの視点によるものを含む）によるコミュニケーション障害の研究を概観する。その中で、既存の研究の主たるものはシークエンス分析としての会話分析であるということを確認し、ALSの人による「口文字」コミュニケーションの相互行為を分析することで、エスノメソドロジー研究の一つの代替的可能性を提示する。

3 結果

ウィルキンソン(2008)によれば、会話分析によるコミュニケーション障害の研究は、「自然に生起する相互行為」を「リアルタイムで」分析する手法として、後天性コミュニケーション障害（失語症、認知症・脳外傷、後天性構音障害とAAC（拡大代替コミュニケーション））、発達性コミュニケーション障害（自閉症・発達性言語障害、吃音、発達性構音障害とAAC）などにおいてなされている。

本研究では、その他の論文や国際学会（Atypical Interaction Conference 2016）等もふまえて、これまでのアティピカル・インタラクションを対象とする研究を概観する。その結果、既存の研究では、発話の順番（turn）とシークエンスの相互行為分析としての会話分析が主となる一方、成員カテゴリー分析、ローカルな秩序、共同作業実践に関する言及は限定されたものであることが示される。さらに、本研究では、ALSの人が介助者と共にコミュニケーションを行なう「口文字」（五十音表と目線を使う「文字盤」から発想を得た「口」と「介助者」で行なう会話法）に焦点を当てることで、成員カテゴリー分析の一方法とその意味を提示する。

4 結論

本研究で概観したとおり、アティピカル・インタラクションの研究として、会話分析の手法を用いたコミュニケーション障害の研究は蓄積されつつあるが、それらは主として相互行為のシークエンス分析としてなされている。一方、ローカルな秩序や行為の成員カテゴリーの研究に結びつくエスノメソドロジー・会話分析の可能性は今後が開かれている。

参考文献

- 水川喜文(2007)「障害者介助実習の実践学」, 山岸健責任編集『社会学の饗宴I』, 三和書房, pp351-73.
- Mizukawa, Y. (2015) "Shared knowledge and collaborative work of 'Kuchi-moji (ban)': Assisted social interaction of persons with ALS and their assistants", paper presented at IEMCA 2015, Southern Denmark University, Kolding, Denmark.
- Willkinson, R. (2008) "Conversation analysis and communication disorders", in Martin, J et al (eds.) *The Handbook of Clinical Linguistics*, Blackwell.
- 本研究はJSPS科研費15K13073（「アティピカル・インタラクションのエスノメソドロジー 障害と相互行為の研究」）の助成を受けたものです。